

# スポーツ

昨今、同じスポーツを通して生きて来た人間として、ちょっと残念な状況が続いている。スポーツは本当にいいものを持つのに、それに関わる人たちの態度が、理解を遠ざけているように感じる。社会があつてのスポーツで、社会の中で健全健康に生きる手法の一つなのだから、それが社会性を外れることはあり得ない。

知的障害のある人々が参加する「スペシャルオリンピックス(SO)」に、日本理事長として関わってきた。スポーツを手段とし、彼らに、一生懸命頑張る、喜ぶ、悔しがる、人に応援される、そんな体験の場を作るのが目的だ。スポーツは、生きていく力を育むために、全て

## 「障害」認識を改める時

スペシャル  
オリンピックス  
日本理事長  
有森裕子氏



ありもり・ゆうこ「女子マラソンで1992年バルセロナ五輪銀96年アトランタ五輪銅メダル。2008年からスペシャルオリンピックス日本理事長。51歳。

切な情動だ。「みんな平等」をやめ、勝敗を明示することにした。

知的障害の問題は、「知的障害」に対する周囲の発想の乏しさにあることが多い。例えば今年、SOの発祥地米国で、活動50周年の記念に、知的障害のアスリートと健常者のパートナー

がともにチームを組む「ユニフォーム形式」のサッカー世界大会が行われた。日本代表は、福島地区の選手たちが、名古屋グランパスの関連の選手と組んだ。最初はパスが通らず、動きを説明しても意思疎通が難しかったようだが、数か月で、パス回しも動きもパートナーと遜色ないほどの驚く成長ぶりを見せた。全ての人にとって、変化の機会を得るといふことがいかに大切かを痛感した。

私たちは「障害」を、自分のこととして考えているだろうか。いずれ高齢になれば、体の機能や認知力が衰え、車いすを利用する可能性もある。その時、今の社会は果たして住みやすいだろうか――と。SOでメダルやリボンを取ると、どんな色でも、皆もう全身で喜びを表す。知的障害の人にとっては自然なのだが、我々はそんな姿を見て、自分が失っていたもの、大切なものを思い出す。アトランタ五輪で銅メダルを取り、「初めて自分で自分を褒めたいと思う」と口にするまでの苦しみ。そして、生きる最高の手段としてのスポーツへの思い。関わりは私の中にも、多くの気づきを生んでくれる。

の人々に与えられるべき機会だと思ふ。理事長になって変えたことがある。以前SOでは、勝ち負けを表示しなかった。メダルの数

も数えなかった。でも、勝ち負けを味わうというのはものすごく大切なこと。負けは失敗ではなく、次に生かせる体験だ。そして悔しさは、向上心を促す大